連載
スラウェシ
市民通信
⑩

廃品回収業者のコミュニティを訪ねて

マスディアナ

●廃品回収業者の住む地区

今回、私が訪問した廃品回収業者の住む地区には、七軒の家があった。それは、家というより掘っ立て小屋といったほうがよいような佇まいである。そこは、タマランレア地区（訳注1）のアサル・ムラ住宅地からさほど遠くない場所であった。

家の壁や天井は、彼らが集めてきた廃品でできている。家の広さは五×四メートル程度しかなく、狭い。そう、彼らの家はとてもひどい状態なのだ。住めるなどとは到底思えないほどである。廃材のトタンでできた屋根はサビだらけで、あちこちに穴があいている。ある家では、分厚い立て看板を屋根に使っており、暑さや水を通さなくて済むという。彼らの家の壁には、捨てられた紙や袋や垂れ幕が使われている。ある家では壁が竹でできており、それに色が塗ってあって、きれいそうに見えた。

家々の前や周りには、ゴミが山のように堆く積まれているのが見える。プラスチック、紙、瓶、段ボール、鉄くず、その他いろいろのゴミが、ここの住人たちによって毎日毎日集められてくるのである。

ところが、彼ら廃品回収業者の家の中を訪ねると、テレビやビデオCDプレーヤーといった家電製品が目につく。それどころか、彼らのなかには新品のオートバイを持っている者もいる。毎月三〇万ルピア（約四〇〇〇円）のクレジット払いだという。一体、どうやって彼らはクレジットを受けられるのだろうか。廃品回収で得たごくわずかのお金でこんな高いものを買ってそろえるなんてできるのだろうか。

廃品回収業者の一人のナリは、「これらはボスから来たものなのよ」という。「ボス」と彼女が呼ぶのは、彼らの集めた廃品をずっと買ってくれるリサイクル・ゴミ商人のことであり、その話はなかなか面白い。

ナリによると、ボスはナリや仲間たちに家電製品一式を自分から貸してくれるそうだ。そして欲しければ、ナリたちがそれらを買い取ることもできる。でも、ただ楽しむだけであれば、ボスは無料で貸してくれるという。「ボスが求めたらいつでも返品する」という約束つきでの話ではあるが。

廃品回収はグループで行うので、昼間、この地区の家にはふつう誰もいない。彼らはゴミを探す仕事で出かけているのだ。ナリは三〇代の女性だが、いつも夫や子どもと一緒にゴミを探しに出かける。ナリ自身の活動場所は、アサル・ムラ住宅地、タマランレア地区にある国立ハサヌディン大学のキャンパスや同大学のポリテクニクの周辺である。一方、夫と子どもはリヤカーを活用して、タマランレア以外の地区をまわってゴミを探してくる。通常、彼らはゴミでいっぱいのリヤカーを曳いて帰ってくる。「このリヤカーもボスが用意してくれたものの一つなのよ」と彼女はいう。

●ボスと会う

ナリのような廃品回収業者は、リサイクル・ゴミ商人たちからすれば、前線で活躍してくれる人々である。ナリが会話のなかで何度も口にする「ボス」という人は、ヌマン・ダエン・ガッパという名のリサイクル・ゴミ商人であった。

ダエン・ガッパは、一九七五～一九八〇年頃にマカッサル市内のベテラン通りで年上の従兄弟と一緒に「プラスチック御殿」

廃品回収業者と収集したゴミ・廃品の山
（松井和久撮影）

と呼ばれたビジネスを始めたのがこの道に入るきっかけであった。その後、彼はバワカラエン通りのホテル・マルリンの近くでこのビジネスを続けた。一九九五年以降、彼はタマランレア地区のリサイクル・ゴミを集めるために、この地に落ち着いた。

以前、ダエン・ガッパはアンカサ第一通りにある「ブディ・ルフール」という名の工場と協力していた。この工場は、購入したプラスチック・ゴミを洗面器、バケツ、ヤカンなどに直接加工する。しかし、両者の協力関係は一四年前に解消した。彼は工場と「ダエン・ガッパだけがその工場へプラスチック・ゴミを納入する」という合意をしていたのだが、結局、その契約を彼が守れなかったからである。

当時、日を追うごとにゴミ処理工場は発展し、ついには毎日一トンのプラスチック・ゴミが必要となったが、ダエン・ガッパはその需要を満たすだけの量の材料プラスチックを納入できなかったのである。現在、ダエン・ガッパは、アンタン地区にあるプラスチック破砕業者や他の小さいプラスチック加工工場と協力している。

●ダエン・ガッパと廃品回収業者

ダエン・ガッパは、いろんなゴミが混じったままのゴミを買う。そして、通常、一週間で一トンの段ボールと一〇〇キロのプラスチックを売ってしまう。プラスチック・ゴミは三種類に分別する。透明プラスチック（ミネラルウォーターのコップやペットボトルなど）は一キロ四〇〇〇ルピア（約五三円）、BOプラスチック（化粧品用のプラスチックなど）は同三〇〇〇ルピア（約四〇円）、HDプラスチック（バケツ、洗面器、椅子、皿など）は同二四〇〇ルピア（約三二円）で売れる。

他方、ダエン・ガッパの鉄くずは業者に売り、その業者がスラバヤの業者へ送るのである。ダエン・ガッパは三番手と呼ばれる。もっとも、彼は自分自身を二番手、廃品回収業者を一番手と位置づけている。

ダエン・ガッパの家はもちろん、ナリの家よりずっと立派である。そこには二台の車が停められている。一台は黒い自家用車で、もう一台はライト・ブルー色の小型トラックであった。ダエン・ガッパは四人の従業員を雇っており、一人当たり月六〇万ルピア（約八〇〇〇円）の賃金を支払っている。他方、彼のために廃材を集めてくる廃品回収業者たちは、従業員の範疇には入れられていない。

ダエン・ガッパは、三〇人の廃品回収業者を集めて一つのコミュニティを作っている。廃品回収業者はジェネポント県の出身者である。彼らは皆、廃品回収業者としてマカッサルにすでに何十年も住んでいる同じひとつの家族に属する。ナリと彼女の友人たちは、アサル・ムラ住宅地の辺りにその後家を建て、コミュニティを形成したが、彼らはダエン・ガッパのために働く廃品回収業者コミュニティの一例である。

●乳児を連れてゴミを探す

もちろん、ナリのような廃品回収業者たちは、これまでに様々な困苦を経験してきたことだろう。廃品回収業者の一人であるデリは、生後一カ月にも満たない赤ん坊を連れてゴミ探しをしたものだと話す。

「私の子、スルタンはまだ生まれて一週間だったけど、キャンパスの辺りでゴミ探しをするときに連れて行くのよ。大学生たちがときどき様子を見てくれたり、あやしたりしてくれてね。あのとき、あの子にはまだ名前がなくて、大学生たちがスルタン・ハサヌディン（訳注2）って名前をつけてくれたの。ハサヌディン大学の大学生だったからかしらね」と微笑みながらデリは話す。五歳になったスルタンは、今でも母親のゴミ探しについていく。

ナリやデリのような廃品回収業者は、日々の彼女らの仕事が環境を助ける行為である、なんてことはもちろん気にかけていない。彼女らが毎日かき集めるプラスチック・ゴミは環境を汚すゴミである。プラスチックには、有害なポリ塩化ビニールが含まれている。プラスチックのなかに含まれるこの原料は土に戻るのが非常に難しいので、再利用のためにリサイクルされる必要があるのである。廃品回収業者はゴミ探しの仕事から一日に平均一万ルピア程度しかもらえない。しかし「これが自分たちの生活を

連載
スラウェシ
市民通信
⑩

廃品回収業者のコミュニティを訪ねて

支える仕事だ」と感じているのだ。

彼らが集めたゴミは、種類、形状、色などをもとに分別される。これらのゴミは、この地区に住むボスのダエン・ガッパへ直接売られる。ミネラルウォーターのコップ型のプラスチック瓶がキロ一五〇〇ルピア（約二〇円）、一般のプラスチック瓶が一本二〇ルピア（約〇・三円）、白い紙がキロ四〇〇ルピア（約五・三円）、新聞紙がキロ一〇〇ルピア（約一・三円）、炭酸飲料のボトルが一本二〇〇ルピア（約二・七円）でボスへ売られるのである。

ナリをはじめとする廃品回収業者の家を訪問した後、私は頭のなかでいろいろ考えながら家へ帰った。廃品回収業者は、しばしば世の中で蔑視される小さき民である。でも、彼らは捨てられたモノをただ拾っているだけなのである。

物を盗んだり汚職をしたりするような類いの人間ではない。それどころか、尊敬され、称賛されるべき人間なのである。

（Masdiana／マカッサル第五高校生）

（訳注1）タマランレア地区はマカッサル市東部に位置し、国立ハサヌディン大学をはじめとする各種教育機関が集まる文教地区であった。現在、幹線道路の拡張工事に伴って地価が高騰し、たくさんの住居兼店舗（ルコ）が建設されている。訳者もこの地区に居住している。

（訳注2）南スラウェシにあったゴワ王国の第一六代王の名前。一七世紀オランダと戦った国家英雄として、マカッサル族やブギス族の間で人気が高く、国立大学や空港の名称として使われている。

〈訳者による解説〉

今回は、廃品回収業者のコミュニティを訪問した女子高校生の記事を取り上げた。一般に、廃品回収業者は社会の最底辺層と見なされており、筆者の認識もその例外ではないようだ。廃品回収業者がテレビなどの家電製品や新品のオートバイを持っているのに驚く様子に、それが表れている。

こうした廃品回収業者にも同業団体があるようである。二〇〇七年四月一一日付けの地元紙『トゥリブン・ティモール』によると、廃品回収業者と廃品収集トラック運転手らが結成した「マカッサル廃品回収業者連合」という団体に属する約一〇〇人が、作業手当を一日一リットルのコメを購入できるレベルへ引き上げるよう求めて、アンタン地区にあるタマンガパ最終ゴミ処理場でデモを行い、要求が認められなければ、ゴミや廃品の収集を行わないと宣言した。

二〇〇七年一〇月末時点で、一リットルのコメは約三〇〇〇ルピア（約四〇円）であるから、一カ月だと約九万ルピア（約一二〇〇円）ほど必要になる計算である。彼らは作業手当としてマカッサル市政府から一カ月当たり六万ルピア（約八〇〇円）をもらっているが、この額は二〇〇四年から据え置かれたままで、一日一リットルのコメを買うことは到底できず、生活が苦しくなっている、というのである。彼らの要求は満たされたのだろうか。マカッサル市の廃品回収業者すべてがこの同業団体に属しているとは思えないので判断はつきかねるが、廃品回収自体は今も続けられており、市民の生活に支障は出ていないようだ。

私も先日、マカッサル市内のある廃品回収業者から話を聞く機会があった。サヌシという名の廃品回収業者は、長年にわたってベチャ（輪タク）曳きをしてきたが、一年前から廃品回収業をするようになった。同様に、ベチャ曳きを辞めて廃品回収業に転じた仲間が二人、同じ場所で彼と一緒に作業をしている。彼らのボスは華人系とのことで、ゴミや廃品を収集・回収するエリアはマカッサル市内全体に及ぶ。彼らを各地へ運ぶトラックなどは、ボスが手配してくれる。集めてきたゴミや廃品はここで分別した後、再び華人系のボスへ売る。ボスは、分別されたゴミや廃品をジャワ島のスラバヤへ送るとのことである。彼らによると、マカッサル市にはまだゴミや廃品の処理工場がないため、ということであった。マカッサル市のプラスチック・ゴミの多くは、ジャワ島から持ち込まれた製品によるものであり、その意味では、プラスチックはジャワから来てジャワへ返っていくのであり、マカッサル市内でリサイクル・再利用されているわけではないようである。

サヌシら廃品回収業者とミネラルウォーターの空きカップを集めてきた子どもたち（松井和久撮影）

マカッサル市では、一九九〇年代後半、オーストラリアからの援助でゴミや廃品の処理工場が建設されたはずである。一九九八年からオーストラリアのオルギ社がマカッサル市と協力して、アンタン地区のタマンガパ最終ゴミ処理場で、廃棄ゴミを使ってコンポストの生産を開始している。しかし、マーケティング上の問題で、これまでに何度も操業を中止している。おそらく、コスト面で競争力がないのであろう。ちなみに、二〇〇七年六月三〇日付けの全国紙『コンパス』に掲載された記事のマカッサル副市長による発言では、現在製造中のコンポストには、一九九四～一九九五年頃のゴミを使っている、ということである。

マカッサル市から出るゴミや廃品は一日に三五八二立方メートル、約七〇〇トンである。ちなみに、東京都から出るゴミは年間約五〇〇万トンであり、これを単純計算すると、一日に一万三七〇〇トン程度のゴミが出ることになる。人口規模がマカッサル約一二〇万人、東京都約一二〇〇万人と考えると、マカッサルのほうが相対的に多くのゴミを出しているようにみえる。

マカッサル市では現在、周辺のゴワ県、タカラール県、マロス県とともに「マミナサタ」広域都市圏を形成し、インフラや交通網の整備を総合的に行う取り組みが始まっている。そのなかに、この広域都市圏から出るゴミ処理の問題も含まれている。

二〇〇七年八月二四日付けの地元紙『トゥリブン・ティモール』によると、州政府高官は、マミナサタ広域都市圏のごみ・廃品の処理のために、ゴワ県パッタラッサン地区に大規模なゴミ処理施設を建設する予定である。ここでは、無機ゴミを再利用可能な工業原材料に替えるとともに、有機ゴミからコンポストを製造する。アンタン地区のタマンガパ最終ゴミ処理場のような最終ゴミ捨て場ではなく、リサイクルのための処理場になる、ということである。この新処理場ができた後、政府は、これまで使ってきたタマンガパ最終ゴミ処理場をコンポスト製造工場に特化させる方針で、その資金融資に世銀が関心を示している。

このように、マカッサル市のゴミ処理問題は様々な展開をみせているが、なぜか、ゴミや廃品の収集・回収システムに関する議論はほとんど聞かれない。日本ならば、行政がゴミ収集車を走らせ、市内のすべての地区をカバーするように回る。マカッサル市にもゴミ収集車はあるようだが、ほとんど見かけることはない。頻繁に見かけるのは、こぼれ落ちそうなくらい堆くゴミを積んだ古ぼけたトラックや、リヤカーを曳いたり大きい袋をもったりして歩く廃品回収業者である。ゴミ収集車では間に合わないので、民間の彼らに委託しているのだろうか。近年、他の地方政府と同様、マカッサル市もまた財政効率化の観点から、民間がやれる事業は民間に任せる姿勢を強めている。すなわち、ゴミ収集・廃品回収システムに関する議論が聞こえてこない現状では、ナリやデリたちに頼るという今の状況は、基本的に変わりそうにない。

マカッサル市は、市政令二〇〇五年第五号によって、指定場所以外へのゴミ捨てを禁止し、「違反者がいた場合には、写真等をつけて通報せよ」と市民に呼びかけている。訳者も、写真は撮らなかったが、高級セダン車の窓から、きれいに着飾った女性がポリ袋を路上にポイポイ捨てる光景を目撃したことがある。また、廃品やゴミの捨て方も秩序だっていない。たとえどのように捨てても、廃品回収業者が来て、きれいに持って行ってくれてしまうためである。

インドネシア経済が回復へ向かうとともに、廃品やゴミの量も増える傾向にある。ナリやデリにとっては稼ぎが増えるので歓迎かもしれない。しかし、環境負荷を減らすためにゴミや廃品を減量するという方向性は、これから現われてくるのだろうか。

最近、知り合いの若者たちが、「スーパーなどの使い捨てポリ袋ではなく、マイ・バッグで買物をしよう」と呼びかけ始めた。そして、廃品回収業者が集めやすいようにゴミの分別をしようという話も出た。こうした身近の話から、ゴミや環境の問題を考え始めること、廃品回収業者の役割を正当に評価して彼らの仕事を側面的に支援していくことが大事だと感じる次第である。

（まつい　かずひさ／在マカッサル海外調査員）